

Book Review

慢性疾患としての歯周病へのアプローチ 患者さんの生涯にわたる QOL に貢献するために

野口俊英・林 潤一郎 編集

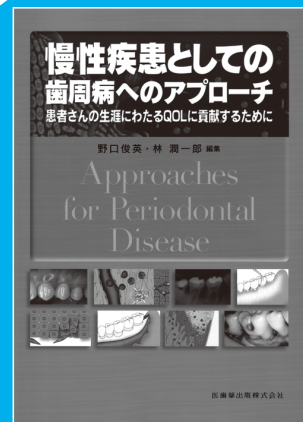


Reviewer

山本松男 Matsuo Yamamoto

(昭和大学歯学部歯周病学講座)

A4 判, 252 頁
オールカラー
定価 (本体 9,000 円+税)
医歯薬出版 刊



アウトカムという言葉をご存じだろうか？ 一般的には「結果」や「成果」を意味するが、医療者教育においては「達成すべき臨床能力」を示し、①正しい歯周病の診断ができる、②臨床情報に基づき患者ごとに総合治療計画が立案できる、③口腔清掃状態の改善をすることができるなど、「実際に疾病をコントロールできること・能力」のことをいう。歯周病の高い診療能力という点では、「糖尿病病態を勘案して歯周組織を長期に維持することができる」とか、「下顎大臼歯部垂直性骨欠損を再生し長期予後を実現する」などの表現が並ぶのかもしれない。基本的知識や技術を一から学ぶボトムアップ型ではなく、望まれるゴールを示し、そこに向かって進むのがアウトカム基盤型の考え方になる。知行合一といってもよいかもしれない。

歯周病については数多くの名著があるが、解剖や組織、細菌学などの内容にとどまらず、免疫学や骨代謝学、再生治療に必要な最新の材料学までを網羅した情報満載のスタイルがよく見受けられる。これは、いわばボトムアッ

プ型の書き方で、知識や技術を熱心に勉強すれば対症療法的な幅は広がるが、歯周病が慢性疾患であることや患者さん特有の条件を念頭に生涯にわたって口腔全体を管理するという総合的な視点から書かれた教科書はあまり見当たらなかった。

本書『慢性疾患としての歯周病へのアプローチ』は、日常診療で遭遇する歯周病病態をわかりやすい典型的なケースをあげて、基礎的な知識や最新の論文の紹介だけではなく、時には臨床の経過や長期の予後を具体的な口腔内写真や検査結果を示しながら、どこまで治せば良いのか、どのようにメンテナンスができるのかという、いわゆる歯周病治療のアウトカム、すなわち到達すべき診療能力を読者とともに考える形で明確に記している。各章のはじめに見開き 2 ページのビジュアルストーリーというまとめで、慢性化する歯周病の仕組みから、治療の根拠、よりアドバンスな外科処置への判断、さらには判断に迷いがちな抜歯への対応等を直感的にかつ明解に解説している。歯周病病態の中に、老化という不

可逆的に身体が虚弱化していく性質をみて、慢性基礎・臨床の最新の研究成果と編集代表の野口俊英先生の 40 年以上にわたる臨床経験とから得られた深い洞察が、それぞれ臨床で直面する疑問に答える形で活かされている。

秀逸であるのが、症例経過の紹介にドクターの意図を示すとともに「患者の声」も載せ、術者と患者のそれぞれの立場から治療経過を検証している点である。まさに診療ユニットの脇で本書を開きながら治療をしたいと思うようなスタイルが工夫されているが、それらを通して「超高齢社会において歯周病を慢性炎症性疾患ととらえ、生涯の主治医として、生涯にわたって口腔全体を管理するという治療スタイル」という、いわばペリオドンティストの究極のアウトカムが提言されている。

口腔を通じて患者さんの健康な生活に貢献するのが歯科医療の本質の一つである。本書は、歯周病治療をベースに、あるべき本質的な歯科医療者のスタイルを提示し、日本の超高齢社会における歯科医療従事者には必携の良書とすることができる。